

5. 淡水魚類

(1) 調査概要

1) 調査方法

淡水魚類の調査は、文献、採集、目視、聞き取りで行った。なによりも採集調査が最も確実なものであるが、各調査員の長年の個人的なデータ蓄積が役立っている。それは目視や聞き取りに関しても同じである。本県における文献は大変少なかったのだが、1991年頃から建設省（現・国土交通省）による「河川水辺の国勢調査」が全国的に行われるようになり、それに伴って地方の河川の綿密な調査も増えてきた。それらの調査は、環境省の「生物多様性調査」とともに貴重な結果をもたらしてくれている。

2) 産地情報の採用基準

情報はすべて、文献情報があるものまたは標本があるもの、現地調査で確認できたものを採用することを基本とした。しかし、一部、ヤマノカミ、絶滅としているアカザやイトヨ、カマキリ（アユカケ）に関しては確実性のある現地での聞き取りを採用した部分もある。

3) 調査結果の概要

本県の絶滅危惧Ⅰ類（CR + EN）6種のうち、アリアケヒメシラウオは絶滅の可能性がある。本種は筑後川と緑川の感潮域にのみ生息するとされていた。しかし、緑川においては近年、アリアケシラウオはわずかに採集されたが本種が確認されたことはない。ニッポンバラタナゴは球磨川水系が天然分布の南限であったが、タイリクバラタナゴの侵入による雑種化で純粋種の保全が危ぶまれるものである。県北のいくらかの地域と阿蘇市の1地点では純粋種が生息しており、保護の必要がある。タイリクバラタナゴの生息域はここ約30年の間に南から北上して拡大している。過去にニッポンバラタナゴが確認されていても、現在、タイリクバラタナゴが侵入している水系においてはすでに雑種化しているものと考えられる。この2亜種間の雑種の中においては、ニッポンバラタナゴの純粋種を外形から判別することは不可能である。2000年現在で、本県の2カ所を含めて全国に10カ所の純粋種生息地が確認されている（福原、2000）に過ぎない。ヤマノカミは、菊池川等では昔から普通に見られたが、1977年に2尾採集されたのが近年における唯一の確認で、生息が危ぶまれるものである。しかし、菊池川河口付近での生息の可能性はまだ期待がもてる。カジカについても似たようなことがいえる。氷川の氷川大堰下流では約30年前は、ウツセミカジカ（カジカ小卵型；両側回遊型）が多く生息したが、今では激減。しかし、近年、菊池川水系の2支川の上流部でカジカ（大卵型；河川陸封型）が多く確認された。

4) RL（2004）との比較

RL（2004）では絶滅種（EX）から準絶滅危惧種（NT）までの33種と要注目種（CS）16種が選定されたが、今回の改訂版RDBでは絶滅種から準絶滅危惧種までの30種と要注目種19種が選定された。RLからのその変更は、準絶滅危惧種としていた南方系魚類であるミナミハゼとノボリハゼ、クチサケハゼの3種を死滅回遊魚の可能性が大きいという理由で要注目種へ移動したためである。また、それ以外の変更点は、絶滅危惧ⅠA類（CR）と絶滅危惧ⅠB類（EN）の判定は現時点では困難であるため、それらをまとめて絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）としたことである。これらの種はRL（2004）においてすべてはCRとしてきたものである。

- ① 初版 RDB (1998) と比べると、ハゼ類の増加が目立つ。しかし、これは生息環境の悪化によるものではない。その主な要因は、当時建設省（現・国土交通省）の河川水辺の国勢調査を始めとする各種の環境調査が近年多く行われるようになったことと、それに伴って採集技術も向上したため、県内では従来見られなかったあるいは極めて希少だった魚種が確認されるようになったことである。また、これらの魚種の中には南方系のハゼ類がいくらか見られるが、そのほとんどは天草諸島の黒潮の影響を受ける地域に見られる種である。
- ② 上で述べた南方系のハゼ類のうち、ミナミハゼとノボリハゼ、クチサケハゼの3種は採集個体数が極めて僅少であることなどから考えて死滅回遊魚の可能性が大きいので、今回は要注目種へ移した。しかし、これら南方系の魚が採られたことは希有なことで、地球温暖化の影響が魚の世界でも表れているのかも知れない。
- ③ 初版 RDB (1998) 発行時点では未確認であったカジカ大卵型が RL (2004) 発行時点ではすでに菊池川水系で局所的に確認されていた。その後最近、菊池川水系の別の支川でも局所的に確認された。カジカ大卵型に関しては菊池川水系がおそらく南限河川だと思われる。
- ④ 初版 RDB (1998) でアカザを絶滅種として記載した時点から、本県下での生息の可能性を感じていた。その後、アカザに関する情報をいくつか入手した。2008年の夏には本県との県境近くのK川で、K社のH氏やS氏等の協力を得てアカザを採捕することができた。その後同じ水系の本県下のM川で採捕を試みたが、確認できなかった。たとえM川には生息しなくても、K川の生息環境を考えた場合、本県下での生息地は十分にあり得ると思われる。今後、精査を続ける積もりである。

5) 今後の課題

昔から普通に生息していた種が近年になって減少している。主たる要因は、捕獲圧よりもむしろ生息環境の悪化である。それは、河川改修工事による河川のコンクリート化、農地の基盤整備による用水路のコンクリート化、家庭雑排水や農薬による水質悪化等によるものと思われる。さらに、ブラックバスやブルーギル、ナイルテラピアなどの無謀な放流によって、帰化魚や外来魚が種類、個体数共に増加している。外来種の増加は、在来種の生息に大きな影響を及ぼしており、希少種の保全にとっても大きな課題である。

初版 RDB (1998) の出版後、天草上・下島の黒潮の影響を受ける河川の河口部で南方系ハゼ類が、わずかな個体数ではあるが採集確認された。ミナミハゼとノボリハゼ、クチサケハゼの3種である。近年、大きく問題化してきた地球温暖化の影響かも知れないし、あるいは以前からあった死滅回遊魚の例であるかも知れない。これら3種は RL (2004) では準絶滅危惧種としていたものであるが、採集個体数も僅少で、死滅回遊魚である可能性も大きいため、今回「要注目種」へ変更した。

水中に生息する魚類には、生息環境の物理的な要因や水質の問題、生物的な要因などが複合的に関係しており、これら淡水魚の減少の要因を一つに求めることは困難である。また、生息域の水は上流から流れてくるものであり、上流側の森林などの自然環境や水質汚染源などの諸問題が広域的に関係する。したがって、魚類の保護対策では総合的な環境問題を考慮する必要がある。

(2) 種の解説

絶滅から準絶滅危惧までのランクに位置づけられる30種について、以下で解説する。

絶滅 (EX)

アカザ科

アカザ*Liobagrus reini* Hilgendorf**カテゴリー**

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

水産庁 危急種

IUCN

関係法令**選定理由** 絶滅**生息環境** 水の比較的きれいな川の中流から上流下部の瀬の石の下や間。**生息状況** かつて生息したと考えられるのは、小国町宮原、関川の上流、菊池川支川の岩野川や繁根木川・上内田川、坪井川、緑川など。夜間に活動することが多く、主に水生昆虫を食べる。5～6月の頃、瀬のレキの下に卵を産着する。**生存への脅威** 農薬使用、水質汚濁、河川改修**特記事項** 宮崎県ではEX、福岡県でEN、佐賀県でI類、大分県でVUとされている。県境近くの県内河川と同じ水系に生息している事実から、熊本県での生息の可能性も十分に考えられる。**絶滅 (EX)**

トゲウオ科

イトヨ(降海型)*Gasterosteus aculeatus* (Linnaeus)
anadromous form**カテゴリー**

環境省 地域個体群

水産庁

IUCN 低懸念

関係法令**選定理由** 絶滅**生息環境** 2月下旬頃から河川に遡上し始め、小川や水田の溝に棲みつく。**生息状況** 坪井川の水路（八景水谷湧水地に続く）での確認の聞き取りがある。佐賀県のイトヨと同様、降海型だったと考えられる。「谷口育英氏は、10数年前、坪井川の水路で子供達に捕獲され水槽に飼育されていたイトヨを見たことがある」（1979）という。**生存への脅威** 水質汚濁、海辺の改変等**特記事項** 巣づくりや、「ジグザグダンス」といわれる求愛行動、「なわばり」が興味深く、教科書でも扱われることがある。**絶滅 (EX)**

カジカ科

カマキリ(アユカケ)*Cottus kazika* Jordan et Starks**カテゴリー**

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

水産庁

IUCN

関係法令**選定理由** 絶滅**生息環境** 河川の中流域、下流域の流れの速い砂礫底に生息し、魚や水生昆虫、甲殻類などを食べる。**生息状況** 両側回遊型の魚類。太平洋側は神奈川県以南、日本海側は秋田県以南の本州、四国、九州に分布。昔は川辺川（相良村）や水俣川、球磨川水系（八代、吉尾）、久木野川などに生息していたという。氷川に生息しているとの聞き取りもあるが、確認はできない。**生存への脅威** 水質汚濁、河川改修**特記事項** 日本の固有種。熊本県での地方名はアユカケフグラ（混称）、セッチョ（混称）などが残っている。

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コイ科

ニッポンバラタナゴ

Rhodeus ocellatus kurumeus
(Jordan et Thompson)

カテゴリー

環境省 絶滅危惧ⅠA類

水産庁 絶滅危惧種

IUCN

関係法令

選定理由

分布境界、雑交移行、近年減少

生息環境

閉鎖的な止水域を好む。産卵床であるドブガイ、イシガイなどの淡水二枚貝の生息が必要条件であるが、近年これらの貝の減少が目立つ。

生息状況

濃尾平野、琵琶湖水系以西の本州、北部九州、熊本に分布したが、近年タイリクバラタナゴとの交雑が進み、全国的に純粋種の生息地が激減した。

生存への脅威

外来種の侵入、交雑、河川改修、池沼の改修、水質汚濁

特記事項

熊本県の少なくとも2カ所の個体群はアイソザイム分析等により、純系のニッポンバラタナゴと判定されている(ニッポンバラタナゴ研究会1997年)。本亜種とタイリクバラタナゴの交雑によって生じた雑種が増加し、両亜種の外形のみによる区別は困難。

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

シラウオ科

アリアケシラウオ

Salanx ariakensis Kishinouye

カテゴリー

環境省 絶滅危惧ⅠA類

水産庁 絶滅危惧種

IUCN

関係法令

選定理由

全国局限、県内局限、分布境界

生息環境

河川の河口域から内湾の沿岸域にかけて生息する。

生息状況

国内では有明海のみに生息し、県内では緑川を中心にいくつかの河口域に限定される。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁

特記事項

有明海と朝鮮半島、中国北部に分布し、有明海と大陸との古地理学的な繋がりを考える上での要素の一つとなっている。近似種のシラウオ、アリアケヒメシラウオとは本種の上顎の先端が下顎よりも前に出ることで区別される。

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

シラウオ科

アリアケヒメシラウオ

Neosalanx reganius Wakiya et
Takahasi

カテゴリー

環境省 絶滅危惧ⅠA類

水産庁 絶滅危惧種

IUCN

関係法令

選定理由

全国局限、県内局限、分布境界、特殊生息生育環境、近年減少、地域的孤立・希少

生息環境

大きな河川の感潮域といった極めて限られた場所に生息。

生息状況

有明海にそそぐ筑後川と本県の緑川河口にのみ分布が限られる。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁

特記事項

日本固有種で、非常に希少な種であるが、絶滅が危惧されている。緑川河口では近年全く採集されておらず、既に絶滅した可能性がある。

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

カジカ科

ヤマノカミ

Trachidermus fasciatus Heckel

カテゴリー

環境省 絶滅危惧ⅠB類

水産庁 危急種

IUCN

関係法令

選定理由

全国局限、県内局限、分布境界、近年減少

生息環境

干潟域と川を行き来する通し回遊魚で、稚魚は春から夏にかけて河川に遡上し、冬に降海する。

生息状況

長崎県島原半島と熊本県宇土半島を除き、諫早湾奥部に注ぐ本明川から佐賀・福岡両県を経て、熊本県緑川にいたる多くの河川に生息するとみられているが、本県においては菊池川までと思われる。夜に活動し、主にエビやカニ類とその幼生を食べる。冬に河口や有明海湾奥部の干潟で産卵する。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁

特記事項

日本では有明海に注ぐ河川だけに分布し、典型的な大陸系遺存種。全長16cm。前鰓蓋骨に4つの棘があるのが特徴。熊本県での地方名はヤマノカミ、ヤマンカミ、ゴリ(混称)などがある。

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

カジカ科

カジカ (大卵型；河川陸封型)

Cottus pollux Günther

カテゴリー

環境省 準絶滅危惧

水産庁

IUCN

関係法令

選定理由

県内局限、分布境界、近年減少

生息環境

川の上流側に分布し、山地の渓流域にまで生息する。瀬の石礫底に多い。

生息状況

本州と四国を中心に、九州の一部に分布し、熊本県にも生息する。南限は菊池川水系と考えられる。近年、菊池川の2支川の上流部で局地的に生息しているのを確認。40年ほど以前までは杖立川(小国)でも生息していたというのは本種の大卵型であったと思われる。川辺川で昔たくさんいたというのも本種であったかも知れない。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁、土砂流入

特記事項

日本固有種。

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

カジカ科

ウツセミカジカ (カジカ小卵型；両側回遊型)

Cottus reinii Hilgendorf

カテゴリー

環境省 絶滅危惧ⅠB類

水産庁 希少種

IUCN

関係法令

選定理由

県内局限、分布境界、近年減少

生息環境

川の中・下流域を中心に生息。瀬の石礫底に多い。

生息状況

本州と四国を中心に、九州の一部に分布し、熊本県にも生息する。南限は氷川と考えられる。かつては球磨川まで生息した。30年前までは氷川下流部で多産していたが、近年激減した。白川では50年以上前にヤマノカミと同時にカジカも採集されている。川辺川(相良村)では昔、竹かごで捕り、みそ汁で食べるほどたくさん捕れていたが、今では絶滅。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁、海辺の改変等

特記事項

日本固有種。

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ギギ科

アリアケギバチ

Pseudobagrus aurantiacus
(Temminck et Schlegel)

カテゴリー

環境省 準絶滅危惧
水産庁
IUCN

関係法令

選定理由

全国局限、近年減少

生息環境

清澄で自然度が高い河川の上流末端部から中流域に生息。

生息状況

九州西北部に局在し、分布域は狭い。昔は湯浦川、佐敷川と球磨川を結ぶ線より以北に不連続的に生息していた。球磨川では近年、国内外来種のギギにおき替わった。現在生息するのは緑川水系と杖立川、および菊池川水系の一部である。昼間は物陰などにひそみ、夜間や雨後に活動して水生昆虫などを捕食する。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁、農薬使用

特記事項

九州産ギバチは関東以北のギバチとは別種とされ、アリアケギバチと呼ばれる。両種は地理的分布が離れているばかりでなく、体形や染色体数なども異なる。

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

シラウオ科

シラウオ

Salangichthys microdon Bleeker

カテゴリー

環境省
水産庁
IUCN

関係法令

選定理由

県内局限、分布境界、近年減少

生息環境

河川の汽水域から内湾の沿岸域にかけて生息。初春の産卵期に河川を遡上する。

生息状況

北海道から熊本県まで、また沿海州から朝鮮半島東岸の広い分布域を有する。熊本県が南限と思われる。アリアケシラウオやアリアケヒメシラウオと比べると分布域が広い。県内では有明海湾口部でも採集されているが、緑川を中心にいくつかの河口域に限定される。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁

特記事項

踊り食いや刺身、寿司、卵とじ、吸い物等で食され、水産上重要種となっている。

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

スズキ科

オヤニラミ

Coreoperca kawamebari
(Temminck et Schlegel)

カテゴリー

環境省 絶滅危惧Ⅱ類
水産庁 希少種
IUCN

関係法令

選定理由

分布境界、近年減少

生息環境

本種の産卵や生育には、抽水植物が生育している水深50cm程で流れがゆるやかな環境が必要。

生息状況

淀川・由良川以西の本州、四国北部、九州北部に分布。本県の菊池川は南限河川である。白川支川の黒川に昔から生息しているものは、江戸時代末頃に菊池川から移植されたものと考えられる。その他の移植による生息地は、江津湖や嘉島町、関川などがある。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁、その他（水辺植物帯の消失）

特記事項

日本では唯一のスズキ科の純淡水魚で、進化学上貴重な種。

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ハゼ科

イドミミズハゼ

Luciogobius pallidus Regan

カテゴリー

環境省 準絶滅危惧

水産庁 希少種

IUCN データ不足

関係法令

選定理由

県内局限、分布境界、特殊生息生育環境、近年減少

生息環境

河口の地下水や伏流水のしみ出すような所の砂利中や海に近い地下水中に生息。

生息状況

分布は一部を除いて西日本に集中している。県下では八代と天草上島のみで生息が確認されている。八代での確認(2004年10月)は半世紀ぶりであり、同時に数尾が採られている。また、天草上島では10年ぶりに1個体のみが確認(2004年10月)されており、減少傾向にあることが窺える。

生存への脅威

海辺の改変等、河川改修、水質汚濁

特記事項

眼はほとんど痕跡化しており、生時の体色はピンク色。今後の精査で県下の新たな生息地が確認できると思われる。本種は特殊な生息環境に棲むので、生息地となっている海岸や河口域では護岸工事などで簡単に絶滅に向かうおそれがある。

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ハゼ科

ムツゴロウ

Boleophthalmus pectinirostris
(Linnaeus)

カテゴリー

環境省 絶滅危惧ⅠB類

水産庁

IUCN

関係法令

選定理由

全国局限、県内局限、分布境界、近年減少

生息環境

河口域や湾奥の泥干潟。生息には泥濁質が重要な必要条件であり、砂底あるいは砂泥底には生息できない。

生息状況

ビルマから台湾、中国、朝鮮半島の西岸、国内では有明海の湾奥部、八代海奥部の不知火干潟に分布。県下では緑川河口部、八代海奥部の不知火干潟に良好な生息地があるが、近年個体数が減少傾向にある。

生存への脅威

海辺の改変等、水質汚濁、海水域の変化、その他(濁質悪化)

特記事項

有明海、八代海の特産種で、かつて大陸沿岸との繋がりを示す種として重要。長崎県の諫早湾は平成9年の干拓事業により閉め切られ、有数の生息地が消滅した。

準絶滅危惧 (NT)

ヤツメウナギ科

スナヤツメ

Lethenteron reissneri
(Dybowski)

カテゴリー

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

水産庁 希少種

IUCN 低懸念

関係法令

選定理由

分布境界、近年減少

生息環境

河川の中下流域の砂底中・砂泥底中に生息。

生息状況

琉球列島と九州南部を除く全国の淡水域に生息。本県下では菊池川水系、加勢川(熊本市)、御船川(御船町)、緑川(甲佐町)、万江川(人吉市)などで生息が確認されているが、生息域が限定されつつあり、個体数も激減。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁、農薬使用

特記事項

一般の魚類(有顎口類)と違って円口類(無顎口類)に属する。口は吸盤状で顎が無く、目の後方に7個の鰓孔があるので、普通ヤツメウナギと呼ばれる。アンモシーテスと呼ばれる幼生には眼が無い。

準絶滅危惧 (NT)

カタクチワシ科

エツ

Coilia nasus Temminck et Schlegel

カテゴリー

環境省 絶滅危惧Ⅱ類
水産庁 危急種
IUCN

関係法令

選定理由

全国局限、県内局限、分布境界、近年減少

生息環境

有明海湾奥部とそこに注ぐ河川の感潮域のみ。

生息状況

日本固有種。産卵期の5～7月、成魚が筑後川感潮域の上流部に遡上する。本明川、六角川、矢部川、緑川でもわずかに産卵するらしいとされる。

生存への脅威

河川改修、海辺の改変等、水質汚濁

特記事項

体は細長く側扁し、尾部が次第に細くなる。胸鰭の上部軟条6本が遊離して長く伸び、体側面は銀白色など、外見的にも大変珍しい魚。初夏の筑後川下流域のエツ料理は有名。本種は小骨が多いので骨切りをし、鮮度が落ちやすいので新鮮なものを料理するのが良しとされる。福岡では平成4年から人工受精卵の放流事業あり。熊本県での漁業・食習慣はない。

準絶滅危惧 (NT)

コイ科

ヤリタナゴ

Tanakia lanceolata (Temminck et Schlegel)

カテゴリー

環境省 準絶滅危惧
水産庁
IUCN

関係法令

選定理由

近年減少

生息環境

河川の中・下流の緩流域とそれに続く用水路、清澄な湖沼に生息。

生息状況

北海道と南九州を除く日本全国に分布。球磨川が南限と思われていたが、鹿児島県川内川などでも近年確認されており、それが国内外来種であるかどうか不明。河川の水環境の変化によって産卵床となる淡水二枚貝（マツカサガイ、イシガイ、ドブガイなど）の減少や水草の減少などに伴って県内全域で減少傾向。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁、外来種の侵入

特記事項

県下の地方名はシピンチャ、ピンタ、エノハピンタ、エノハ、セギリなど。

準絶滅危惧 (NT)

コイ科

アブラボテ

Tanakia limbata (Temminck et Schlegel)

カテゴリー

環境省 準絶滅危惧
水産庁
IUCN

関係法令

選定理由

近年減少

生息環境

平野部を流れる細流や湧水域、用水路でオオカナダモなどの水草が繁茂しているような場所。

生息状況

濃尾平野以西の本州、淡路島、四国の瀬戸内海側、高松川（阿久根市）までの九州に分布。かつては県下の平野部のほぼ全域に多く生息していた。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁、外来種の侵入

特記事項

熊本県での地方名はシピンチャ、シピンチョ、シピンタ、ボテ、シピン、セギリなど。

準絶滅危惧 (NT)

コイ科

セボシタビラ

Acheilognathus tabira subsp.2

カテゴリー

環境省 絶滅危惧 I A 類

水産庁 希少種

IUCN

関係法令

選定理由

分布境界、近年減少

生息環境

河川の中・下流域の用水路の穏やかな流れに生息。

生息状況

九州北西部と熊本県に分布し、緑川が南限。県内では菜切川（長洲町）、菊池川水系、尾田川（天水町）、加勢川・江津湖（熊本市）、緑川（甲佐町）などで生息が確認されている。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁、外来種の侵入

特記事項

熊本県での地方名はシビンタ、シビンチャ、ピンタ、セギリなど。ヤリタナゴに似ているが、本種の方がヒゲが短い。

準絶滅危惧 (NT)

コイ科

カネヒラ

Acheilognathus rhombeus (Temminck et Schlegel)

カテゴリー

環境省

水産庁

IUCN

関係法令

選定理由

分布境界、近年減少

生息環境

河川下流の緩流域、それに続く用水路、平野部の湖沼に生息。産卵床はマツカサガイ、イシガイ、ドブガイなどの淡水二枚貝。

生息状況

琵琶湖淀川水系以西の本州と九州北西部に分布し、緑川が南限。県内では菜切川（長洲町）、菊池川水系、尾田川（天水町）、加勢川・江津湖（熊本市）、矢形川（嘉島町）、緑川（甲佐町）などで生息が確認されている。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁、外来種の侵入

特記事項

タナゴ類は一般に春に産卵するものが多いが、本種の産卵期は9～11月。日本最大のタナゴで全長12cmにもなる。熊本県での地方名はピンタ、エノハピンタ、カワピンタ、タイシピンなど。

準絶滅危惧 (NT)

コイ科

カゼトゲタナゴ

Rhodeus atremius atremius (Jordan et Thompson)

カテゴリー

環境省 絶滅危惧 I B 類

水産庁 希少種

IUCN

関係法令

選定理由

全国局限、分布境界、近年減少

生息環境

河川の下流の緩流域、用水路に生息。産卵期は3～6月で、マツカサガイやイシガイ、ドブガイなどに産卵。

生息状況

九州北部、熊本県に分布し、球磨川が南限。県内では菜切川（長洲町）、菊池川水系、加勢川・江津湖・八景水谷（熊本市）、緑川（甲佐町）、球磨川水系などで生息が確認されている。

生存への脅威

河川改修、水質汚濁、外来種の侵入

特記事項

熊本県での地方名はヒラピン、ピンタ、シピンタ、シビンチャ、シピンタンなど。

準絶滅危惧 (NT)

コイ科

カワヒガイ

Sarcocheilichthys variegatus variegatus
(Temminck et Schlegel)

カテゴリー

環境省 準絶滅危惧
水産庁
IUCN

関係法令

選定理由 分布境界、近年減少

生息環境 川の中流から下流域や灌漑用水路などの、わずかに流れがある水深1～3m程度の砂礫底を好む。イシガイやドブガイなどの淡水二枚貝の体内に産卵する。

生息状況 愛知県豊川水系以西の濃尾平野、琵琶湖流入河川、京都盆地、山陽地方、九州北西部および壱岐島に分布。南限は球磨川

生存への脅威 河川改修、水質汚濁、外来種の侵入

特記事項 琵琶湖固有亜種であるビワヒガイが球磨川(1985年)や緑川ダム(1993年)等で定着していることが確認されており、それとの交雑も懸念される。

準絶滅危惧 (NT)

ハゼ科

タネハゼ

Callogobius tanegasimae
(Snyder)

カテゴリー

環境省
水産庁
IUCN

関係法令

選定理由 県内局限

生息環境 河口域とその付近の海岸の砂泥底に生息。感潮域の最上流部にまで侵入する。

生息状況 国内では紀伊半島から沖縄県の西表島までに分布。本県下では天草の限られた河川にのみ生息。天草上島の小河川の河口域では、干潮で水が退いた砂泥部の石の下に潜んでいるのを採っている(2003年7月)。

生存への脅威 海辺の改変等、河川改修、水質汚濁

特記事項 亜熱帯性ハゼ類。本県下では極めて希少で、確認は天草地方でのみ。

準絶滅危惧 (NT)

ハゼ科

カワアナゴ

Eleotris oxycephala
Temminck et Schlegel

カテゴリー

環境省
水産庁
IUCN

関係法令

選定理由 近年減少

生息環境 河川の下流域から汽水域にかけての泥底、砂底、礫底に生息。コンクリートブロックなどの隙間に潜んでいることが多い。

生息状況 茨城県以南の本州太平洋側、四国、九州、屋久島、沖縄に分布。夜行性の魚であることや物陰に隠れる性質のため人目に触れる機会は多くない。

生存への脅威 河川改修、水質汚濁

特記事項 県内での地方名はナガフチドンコ、コモツキ、ヤカケ、ヤカギ、トラハゼ、ササイラ、アブラメ、ドンコ(混称)など。

準絶滅危惧 (NT)

ハゼ科

チチブモドキ

Eleotris acanthopoma Bleeker

カテゴリー

環境省
水産庁
IUCN

関係法令

選定理由 近年減少

生息環境 河口域や淡水の影響を受ける内湾に生息。

生息状況 台湾島・西および南太平洋に分布。国内では千葉県から西表島・小笠原諸島に生息。本県下では天草の限られた河川にのみ生息。生息状況の詳細については不明。

生存への脅威 海辺の改変等

特記事項 亜熱帯性ハゼ類。同属のカワアナゴに酷似する。本県下では極めて希少で、確認は天草地方でのみ。死滅回避魚の可能性も僅かに残る。

準絶滅危惧 (NT)

ハゼ科

タビラクチ

Apocryptodon punctatus
Tomiyama

カテゴリー

環境省 絶滅危惧 I B 類
水産庁
IUCN

関係法令

選定理由 近年減少

生息環境 河口干潟や前浜干潟の軟泥底に生息し、テッポウエビ類の生息孔内に見られる。

生息状況 三重県から宮崎県の太平洋、山口県と長崎県の日本海・東シナ海、兵庫県から大分県の瀬戸内海、佐賀県から熊本県の有明海・八代海に面した地域に分布。

生存への脅威 海辺の改変等、水質汚濁、土砂流入

特記事項 日本固有種。自然状態に保たれた干潟の指標生物とされる。生活史は詳しくは知られていない。

準絶滅危惧 (NT)

ハゼ科

チクゼンハゼ

Chaenogobius uchidai
(Takagi)

カテゴリー

環境省 絶滅危惧 II 類
水産庁
IUCN

関係法令

選定理由 近年減少

生息環境 河口のきれいな砂地や砂の多い干潟に生息。

生息状況 北海道から宮崎県にかけての太平洋、京都府から鹿児島県にかけての日本海・東シナ海、兵庫県から大分県にかけての瀬戸内海に面した地域に分布。

生存への脅威 埋め立て、河川改修、水質汚濁、土砂流入、その他（汚濁等）

特記事項 日本固有種。干潟の減少や河口域の汚濁等によって全国的に生息適地が減少傾向にある。自然状態に保たれた干潟の指標生物となり得る。

準絶滅危惧 (NT)

ハゼ科

マサゴハゼ

Pseudogobius masago
(Tomiya)

カテゴリー

環境省 絶滅危惧Ⅱ類
水産庁
IUCN

関係法令

選定理由 近年減少

生息環境 良好な自然環境が保たれた河口干潟の砂泥底に生息。

生息状況 宮城県以南の本州・九州・南西諸島・朝鮮半島に分布。

生存への脅威 埋め立て、河川改修、水質汚濁、土砂流入、
ヨシ原の減少

特記事項 全長 3cm の小形ハゼ。生息環境の悪化に敏感であるの
で、自然状態に保たれた干潟の指標生物となり得る。

準絶滅危惧 (NT)

ハゼ科

ゴマハゼ

Pandaka lidwilli
(McCulloch)

カテゴリー

環境省 絶滅危惧Ⅱ類
水産庁
IUCN

関係法令

選定理由 近年減少

生息環境 河口域や淡水の影響を受ける漁港等に生息。

生息状況 三重県から屋久島、対馬、五島列島に分布。船溜りの隅、
橋桁やテトラポットのまわり、湿生植物の根元などで群
れて浮遊する。浮遊して生活するので立体的な生息空間
を必要とする。また、水温や塩分への選択性が高いので
生息適地が限定される。

生存への脅威 海辺の改変等、水質汚濁、その他（水質汚染、廃棄物）

特記事項 日本固有種。全長 1.8cm のきわめて小型のハゼで、日本
で最も小さい汽水・海水魚。寿命は約 1 年。

準絶滅危惧 (NT)

ハゼ科

シロチチブ

Tridentiger nudicervicus
Tomiya

カテゴリー

環境省
水産庁
IUCN

関係法令

選定理由 地域的孤立・希少

生息環境 低塩分の海域の砂底に生息し、河川に侵入することはほ
とんどない。

生息状況 瀬戸内海と有明海のみに生息。微妙な低塩分濃度の海域
にしか生息しない汽水魚で、有明海の周辺海域や不知火
海では見られない。

生存への脅威 干潟の減少・消失、水質汚濁、その他（底質悪化）

特記事項

要注目種 (CS)

ドジョウ科	スジシマドジョウ 小型種九州型	<i>Cobitis</i> sp.2 subsp.3
ヨウジウオ科	ガンテンイシヨウジ	<i>Hippichthys (Parasyngnathus) penicillus</i> (Cantor)
ヨウジウオ科	テングヨウジ	<i>Microphis (Oostethus) brachyurus brachyurus</i> (Bleeker)
ハゼ科	ワラスボ	<i>Taenioides rubicundus</i> (Hamilton)
ハゼ科	チワラスボ	<i>Taenioides cirratus</i> (Blyth)
ハゼ科	シロウオ	<i>Leucopsarion petersii</i> Hilgendorf
ハゼ科	オカメハゼ	<i>Eleotris melanosoma</i> Bleeker
ハゼ科	ミナミハゼ	<i>Awaous ocellaris</i> (Broussonet)
ハゼ科	スミウキゴリ	<i>Chaenogobius</i> sp.1
ハゼ科	ビリング	<i>Chaenogobius castaneus</i> (O'Shaughnessy)
ハゼ科	アシシロハゼ	<i>Acanthogobius lactipes</i> (Hilgendorf)
ハゼ科	ボウズハゼ	<i>Sicyopterus japonicus</i> (Tanaka)
ハゼ科	ノボリハゼ	<i>Oligolepis acutipennis</i> (Valenciennes)
ハゼ科	クチサケハゼ	<i>Oligolepis stomias</i> (Smith)
ハゼ科	ヒナハゼ	<i>Redigobius bikolanus</i> (Herre)
ハゼ科	スジハゼ	<i>Acentrogobius pflaumii</i> (Bleeker)
ハゼ科	ルリヨシノボリ	<i>Rhinogobius</i> sp. CO
ハゼ科	ショウキハゼ	<i>Tridentiger barbatus</i> (Gunther)
ギマ科	ギマ	<i>Triacanthus biaculeatus</i> (Bloch)

(3) 文献

1. 環境省自然環境局 (2002) 自然環境保全基礎調査・生物多様性調査・動物分布調査報告書 (淡水魚類) 生物多様性センター.
2. 瀬能 宏監修 (2004) 決定版 日本のハゼ. 平凡社.
3. 福原修一 (2000) 貝に卵をうむ魚. トンボ出版.
4. 川那部浩哉・水野信彦 (1989) 日本の淡水魚. 山と溪谷社.
5. 藤井法行 (1986) 移入魚. 土龍 MOGURA . 12. 16 - 18. 熊本洞穴研究会.